要するに此の地方の竹材の利用は一つは前記の自家用としての家庭手工業品を得、一つは小野・諏訪等の竹簀の乏しい地方に僅かの市場を求むるの程度で十分ではあるまいかと思考する。而してまさに荒廃せんとする此の地方幾多の竹簀をして、よくその地理的事情を明らかにし以て更生の域に達せしめんとするも現下農村の一課題ではなからうか。（一九三四・二・二）

註（九）（四）に同じ　三二頁
（一〇）（四）に同じ　三四頁

備後の名勝下帝釋峽（二）

吉野益見

一のつゞき

猿飛岩。前者の盡くる所に在り、河中岩骨稜稜露出し茲に數個の巨岩點々渡渉に便なるものあり、猿之を飛び川を越ゆるに因り名づく。是又河床の一勝景なり。

黒岩城趾。前者を去る少許右岸の高臺上に在り。平坦面に城塞の跡存し、附近に練武の弓場馬場等あり、尚水涯に水吸場馬洗場及鍬納場等ありて、多くの史跡を口碑に留むるも、史實の明かならざるを憾む。

蜂の子嶽。前者より少許の左岸屈曲部に直立する尖峰、峭壁直下百餘米、幅亦之に適ふ、壁頭松其他の綠樹繁り、岩面の中央に斜に一の長裂罅横はり、眞柏つげ等之に沿ひ散點し之を彩れるあり。岩脚の水涯に接する所、幾多の彎曲穿孔あり、こゝに蜂の子の深淵を湛へて水鏡を

なし、巖壁及綠樹之に投影し、實に峽の一大偉觀たり。

永新曲峽の概括。以上堰堤より峰の子嶽に至る半楕圓の曲峽は、兩岸悉く絶壁所謂眞峽をなして、岩壁及之を彩る森林美の優なるもの連續し、河床又深く浸蝕されて多くの淵瀨を形成し、淵は水涯彎入穿孔狀の奇觀あり。峽壁及河床には洞窟の存するもの多く。崖頭には所々古城趾の聳ゆるものあり。峽谷美の質と量とに於ては實に全峽中第一位を占む。其前半に於て玻璃、扇場、六郎谷の諸嶽。扇場、清澤、烏が樋の諸淵。立石、戸宇の平及黒岩の諸城趾。面抜の石門等は其標式的のものなり。其後半に於ては花面狗賓、土原、蜂の子の諸嶽。花面ヤマ、荒瀬洞窟、長(なさ)が淵等は其標式的のものに屬す。

永新アルプス。こは永新曲峽の東方に馬脊地をなす連嶺の總稱にて、小峯相並び之を聯ぬるに小徑ありて各峰に達し得。鬱蒼たる松樹を點綴するに眞柏紅葉の美を以てし、春秋の美觀は一幅の活圖畫たり。之等の岩上に箕踞し放眸せば、對岸の殿樣屋敷、立石嶽、戸宇の平城趾、面抜、霧降瀧、呼岩、花面狗賓嶽等數多の勝景は、これ皆指呼の間に在り。又帝釋川は此アルプスの西麓を繞りて曲流し、囂々たる水聲は山谷に響き渡り、實に眺望絶佳峽中觀望の一大中心たり。

二　永新の直峽

中部の直線峽谷にて、蜂の子嶽の盡くる所より江草に至る、長さ一一〇〇米（十町）あり、北三〇度東—南三〇度東の走向を取る。岩屋谷川は西より其中央に流れ込む、此の地點の北半は相當の峽谷をなすも、南半はV字谷開く。

イ、北　半

河床は流れ緩かなるが、所々巨岩の横はるもの多し、峽畔亦所々に洞窟の存在を見る。

岩屋谷川の峽谷（岩屋峽谷）。岩屋谷川は源を永渡村の和田方面に發し東流帝釋川に注ぐ。流水は多からざるも、川口より八〇〇米（七町）間

は眞の峽谷をなす、兩岸は削立の石灰岩壁にて、河床亦石灰盤岩たり、樹木は鬱蒼として峽上を覆ひ晝尙暗き所多し。川口を西進せば漸次峽谷の幅を減じ雌釜に至る、こは流水が盤岩を浸蝕して作成せる瀧壺にて、直徑五・五米の圓形をなし頗る奇景を呈す。之に接し高さ一米餘の瀧懸る、瀑水奔騰瀧壺に入る。これより七米を隔て小釜あり、直徑二・七米、前者と同一の瀧壺にて、之に接し亦小瀧懸る。これより一一〇米間は流路迂餘曲折するも、其間更に多くの小瀧及び瀧壺の存在を見る。要之此地域は各種の小瀧瀧壺存し千變萬化の幽境たり。次は谷開きV字形をなすこと一一〇米、再び眞峽を形成す。其劈頭に於て瀧壺雄釜あり、長徑九米、短徑七米、深さ四・五米に達す、紺碧の水綠樹に覆はれて愈々青く悽愴神を寒ふす。之に接する懸瀑高さ一米餘壯觀を呈す。これより一一米間は幅一米の峽谷をなし、茲にS字彎曲形の正面瀑懸る。高さ六米頗る豪宕を極む。要之此後地域三三〇米間は眞峽をなし亦小瀧及瀧壺等の奇勝續出す。此前後の兩峽谷は岩屋谷川下流の洞窟が永年間に天井を墜落せしめて生成せしものにて、兩岸及河床の勝景は全く洞窟のそれと同一なり。昔時八〇〇米の長洞窟今や燭を秉らずして鑑賞し得る便あり、されど道なき所鐵索の設備を要する所あり。前峽は名勝區たるの價値充分なりと認む。

ロ、南半

此V字谷の峽畔には綠樹茂り洞窟亦多く、所謂地下美伏在の靈域をなし、河床には所々深淵の幽境あり。

天川洞窟。岩屋谷川の口より南方三百米を隔て帝釋川の右岸天川に在り。低狹なる入口を西進する少許、豁然たる廣場に達す、こは長く北西に延ぶるも傾斜極めて緩なり、幅約四五米高さ六七米あり、これ大洞道にて、仰げば高き天井には白色大幕の長く懸れる如きあり、或は大小無數の鍾乳石垂下し、龍巻氷柱乳房傘狀をな

せるあり、或は薄板の縦に懸る如きあり、或は隣々相癒合して一柱となれるありて、千態萬狀形容すべからず。眼を轉じ側壁を窺へば、純白

第五圖　天川洞內部

棚をなす所あり、こゝに石柱高く天井に連なるもの、大石筍の簇立せるもの、矮小にして松茸形をなすものありて、竹藪秋の山を聯想せしむ。或は神棚佛壇に似たるもの、或は婦人の長脚に類するもの、石灰華の球形岩面に沈澱せる南瓜岩あり、尙太鼓岩冠岩等夥多の奇形美觀を呈す。又側壁には數段水蝕の痕跡を認むべき所ありて、水量の變化と洞窟の浸蝕とを示す。次に洞底を見るに、砂礫の沈積すること全く河底に異ならざるものあり、是れ地下水の運び來りしものなるを示す。大洞道の末に近き狹路を昇り更に降れば亦一の廣場に出づ、之れ亦奇形の鍾乳石懸下するもの夥多なり、洞は西方に向つて開くも大ならず、其幅二三米高さ四五米、之れ小洞道なり。之に會する洞道の西南に開けるものを進めば、天井に氷柱の如き鍾乳石夥多羅列して頭背に觸るるを覺ゆ、其洞底には礫及水溜を見、遂に前の大洞道に出で環狀をなすことを知る。更に小洞道を進めば、清冷なる地下水滔々流れて川をなし洞中のドリーネに入るに會ふ。洞口より大洞道を半進して小洞道に入り此ドリーネに至る距離百八十米あり。こゝに低き新河道と高き舊水路と相合するあり。前者は十五米の間清水を湛へ淵をなす所あり、其窮まる所に

水源あり、湧水迸出穴を壓し渦狀をなす。後者を上進せば茲に懸瀑の跡數所と、瀧壺甌穴數個並に人面側示狀の奇岩とを認む。ドリーネ所在地よりこゝを通り五十米進めば洞內の最高所に達す。仰げば自然彫刻の大天井高く懸る十餘米、瞰下せば下方暗黑裡に轟々たる水聲を聞く、冒險綱梯により懸崖十三米を下り見れば、天川奥洞の地下河流なり。其幅廣き所六米、長さ二十八米の間、圓礫河底に累積す。衣を揭げ鏡の如き清冽の水に足を浸して上る、低き一大天井に遇ふ。辛うじて水中を匍匐し漸くにして一大廣場に出づ、天井には大古ながらの鍾乳石垂下して一大美觀を呈す、廣場の盡くる所、大天井岩河水と相會し、こゝに亦湧水の迸出を見る。此水源は幅三米、礫岩之に滿つ。さればこそ一、二米掘下げ進めば又大廣場に出で愈々水源を探究し得べきが如し。奥洞の河水は又一のドリーネに流れ込み、前記新河道の水源をなす。此洞窟は實測の長二百七十一米、今や帝釋峽中第一の長さと美觀とを有し、洞內環狀をなす所あり、鍾乳石石筍其他太鼓岩冠岩等夥多地下美の存在するのみならず、地下流現存し其變遷の跡を尋ぬる好個の資料として價値甚大なるものなり。思ふに此洞窟の方向は帝釋川の方向と略々一致し、之に平行し、地下流の水源は頗る帝釋川に接近し、其水面と略々同一の高さにあるの感あり。且河底の圓礫が帝釋川のものと異らざる點より推考せば恐くは其水源は帝釋川の右岸にあらんか、若し不然岩屋谷川の下流にあらん。

大谷洞。前者の南方少許に在り、石灰大岩壁の低部に洞口を開く、大石柱數個聯列し、天井高く快活に頗る美觀を呈す。口內は三洞に分れ、最長二十米に達す。岩壁の高部には更に他の洞口を開き、宛然階上の窓に類し、全外觀は兩階洋館の大厦を聯想せしむ。

ツクデ淵。前者より一〇〇米に在り、長さ三六米、幅七米、深さ九米、淵上に巨岩聳立して轉た悽愴を加ふ。

青木淵。前者より一一〇米を隔つ、長さ七二米、幅七米、深さ七米、其の大さ遙に前者を凌ぐ。

永新直峽の概括。河床の巨岩深淵の勝景に配するに峽中洞窟の地下美を以てし、天川洞窟の如き帝釋全峽中の白眉なるものあり。又岩屋谷川峽谷の如き其成因が全く長大洞窟の天井墜落による適例を示すものありて、斯學上幾多の研究資料を具備する靈域たり。

三　櫻尾の曲峽

此曲峽は二に分ち、初の小盆地と次の眞峽とは大部を占め、終の小部は亦小盆地をなす、即ち兩盆地の間に眞峽を挾む地域たり。前者は其長一四〇〇米（一三町）にて、初は南三〇度東―北三〇度東、終は北六〇度西―南六〇度東の走向を取る、後者は其長四五〇米（四町）に過ぎず。

日比須盆地。川の屈曲部に開展する長楕圓の地、底部の河床には渦の舞及牛洗の二淵あり、夫々名實共に具はるあり。又左右兩岩に接する河成段丘の稻田化せるものあり。尙左岸には畑地及茅屋存し、大古の面影を傳ふ。要之豁然且清閑幽趣に富む別仙鄉、探勝者休息の最適所にて、名勝三段峽餅の木盆地に髣髴たるものあり。

日比須弘法嶽。左岸に聳立し弘法大師を祀る故に名づく。高さ一一〇米、幅一五〇米に達す。其容姿圓滿優美岩面清滑潔白、宛然昇仙峽の覺圓峰を觀るの感ありて、全峽中第一位の圓峰をなす。絲樹は其頂巓及麓部に繁茂し中部に斜に生育して頂麓のそれと相連結せるあり。岩壁面には此の斜生樹と相並び長き樋の斜に奇形を呈するものあり、之と反對側の白岩壁に石灰洞三個相接するあり、何れも傾斜面に穿たれ其奥に達し得、其長さは十餘米乃至三十餘米に過ぎざるも、其最上のものは比較的原形を保持す、乘燭進入せば、石柱並列の廣場あり、こを過ぎ狹路を進めば再び廣場となり、天井に鐘、搖籃、洞底に劍、墓石、洞側に塑像人骨等の奇形をな

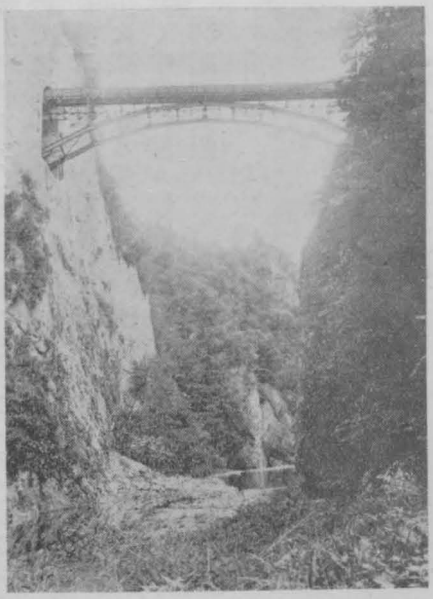
せるもの存し、一大偉觀を呈す。此等の洞窟は嘗て此圓峰上の流水、石灰岩の裂罅を溶蝕し去りて作成せしもの、今や水源涸渇して現狀をなす。其對岸との間にヲマツ淵あり、長さ四五米、幅一一米、深さ一〇米の碧潭をなす。

フサゲ淵。前淵を去る少許深く右岸に彎入し一大青淵をなす、淵上白岩の斷崖には多く縱走の裂罅相並列し、其末端に接する所、流水の浸蝕を受け數個の洞窟狀の奇觀を呈するものあり、崖樹其上を裝飾し更に幽邃と森嚴とを加ふ。長さ三六米、幅一一米、深さ一四米。

大聖淵。前者より四〇米を下り左岸に偏在す、よく前者に似て水涯彎入更に深く、岩壁將に墜落の怪狀をなす。長さ一八米、幅五・五米、深さ三米、下る少許にして黒瀨あり、白水浩々蕩々矢の如く流れ去り奔騰壯觀を呈す。

櫻尾嶽。高さ一二〇米、幅一〇〇米、仰げば廣大なる直立斷崖面の中央に縱の窪あり、之に副ひ青樹の茂れるを見る、又白面には所々眞柏及つげの散點せるものありて單粛を破る。水涯又流水の直突を受け深き刳入を作り、深淵を形成し綠藍の砂渡淵を湛ふ、其長さ一一〇米、幅九米、又第一導水橋は櫻尾嶽の中腹に架し、山水及人工美の秀景一所に相會す。

第一導水橋。導水橋二あり、何れも草木川笹尾堰堤より櫻尾にて本水道に合する支水道に架



第六圖　導水橋

するものに屬す。第一導水橋は帝釋川を横ぎりて、弧狀の鐵桁を設け、其上に幅二・四米、深さ一・五米の鐵水渠を載せ櫻尾嶽懸崖の中腹に通ず、其長さ四五米、高さ五一米、一の橋脚なし、これ實に峽中の一大奇橋にして、弧狀の長虹高く雲際に懸るに似たり、甲州桂川の奇橋も之に比するに足らず、神橋（雄橋）以て之に比すべく、唯天然橋たらざるを憾むのみ、架橋奇、其環境亦奇なり、誰か奇橋の名を拒まん。

蛭淵。前者より少許の右岸に在り、これ亦水涯の彎入と斷崖の直立とに名あり、長さ五〇餘米、幅七米、深さ三・六米。

櫻尾の丸淵。前者を去る少許左岸に偏す、圓形なるより名づく。

江草の大淵。前者を去る少許に在り、これ亦流水直突のため深く刳入る。右岸の岩壁には斜に大裂罅線あり綠樹之を點綴す。略々正方形をなし、長さ七三米、幅一三米、深さ一六米。

江草嶽。右岸に屹立す、上半は青樹鬱蒼、下半の白壁は幕を張り、水涯亦流水浸蝕の奇形を止む。高さ六〇餘米、幅廣き所二一八米、之に近く江草の小淵あり。

第二導水橋。前者に接し、帝釋川右岸の懸谷上に架設せる鐵橋にて、河中より之を仰げば、高く中空に懸り壯麗繪の如し。

和宗狗賓嶽。前者を去る少許の右岸に聳立す

第七圖　和宗の狗賓嶽

る尖峰にて、上部に綠樹を冠し、下部亦蒼樹を

袴とし、中部に白衣を纏ひ美容盛裝、遙に堰堤狗賓嶽に對應す。之に接し清澄鏡の如き小淵あり、優姿之に映ず。

下櫻尾嶽。前者より少許の左岸に屹立す。斷崖六〇餘米、幅二一〇米を過ぐ、白岩面の上部は綠樹之を蔽ふも、下部は全く裸出し水涯深く灣入す、其對岸も亦綠樹の懸崖たり。河床流を堰き深淵清水漫々漾々紺碧藍の如し、こを元重淵と呼ぶ。此は實に南方入峽の眞の門戸にして、城端懸崖が北方入峽の眞の門戸たるに對比すべし。

和宗盆地。前者の盡くる所に在り、帝釋川及草木川の會點に發達する河段丘は今や田圃と化し、茅屋其中に照在し四周青山に圍まれて、山間清淨の別天地をなし、遙に北方の帝釋盆地に對比す。

櫻尾曲峽の概括。兩盆地の間に介在する眞峽には幾多の絶勝を包む。首位にある日比須の弘法嶽は圓峯の白眉、末位に近き和宗狗賓嶽は尖峰の絶美をなし、其間に櫻尾嶽懸崖の中腹に架する第一導水橋の奇觀を呈するあり、又斷崖の下幾多の深淵水境をなし清寂幽玄を極め仙鄉をなすあり、茲に山水の美妙を集む。尚此曲峽には珊瑚化石の存在を見る。

下帝釋峽の總括。堰堤和宗間は概ね眞峽をなし、其中間及峽尾に小盆地を含みて變化を與へ、又處々古城趾の崖頭に聳ゆるありて、宛ら歐洲ライン峽谷美に髣髴たるものあり、其流水多からざるは、却て水涯灣入諸形式の觀察と徒涉探勝とに至便なり。尚峽壁には所々古生代の紡錘蟲海百合及珊瑚化石の存在するありて、幾多研究の資料を供す。即ち此下地域は地上美眞峽幽淵、地下美洞窟及古生代化石に於て其特色を有し、中地域の帝釋地方神龍湖と相對峙し、否之を凌駕するものありて、帝釋峽秀景の量及質の上に於て頗る重要性を帶ぶ。然るに名勝區の中地域は神龍湖生成のため、其三分の二を水中に埋沒して峽谷美の眞價を減殺し、僅に神橋を中

心とする帝釋地方の一小區域に其餘景を止むるに過ぎざるの現況に照せば、此下帝釋峽は徒に區外の勝景にして放置すべきにあらず、一日も早く國家の公認により名勝區に編入し帝釋峽石灰岩峽谷自然美の眞價を周知せしめ、此景觀の保存を望むこと切なり。

參考圖書

參謀本部五萬分の一地形圖（庄原新見上下油木岡幅）地質調査所地質圖（庄原岡幅及同說明書）

山陽中央水電株式會社の堰堤設計圖、第一第二導水橋梁圖

辻村太郎、地形學、日本地形誌、新考地形學

廣島縣、史蹟名勝天然紀念物調査報告（第一、二輯）

吉野益見、名勝帝釋峽（地理敎材研究）（第五、七輯）

同　帝釋臺カルスト（地學雜誌第五〇一、五〇二、五〇四號）

此稿を草し得しは、全く縣岡太課長吉田屬の厚意と神石郡久岡宮野兩村長横山赤木横溝三氏實地指導との賜なり。茲に深く感謝の意を表す。

新著紹介

漁村社會經濟調査　四六版一三九頁　東京市芝協調會發行　四月　定價四〇錢

本書は山形縣下の唯一の島、飽海郡飛島を漁村として見た記錄で、協調會囑託宮本倫彦氏の執筆にかゝるものである。沿革的、經濟的、社會的の三部に分けて觀察し考究を加へてある。之を通覽すると勝浦、浦、法木の大字に分かれた飛島村がいかに漁業といふ一つの生業の爲めに大字の間に隔りが出來てゐるかといふことが窺はれる。生活に關する多くの記錄と現狀とが記述されてゐるから人文地理學の材料とするに足りる。（S）

○壹岐島民俗誌　山口麻太郎著　一誠社出版　定價二圓

四六版二八六頁の小冊子ではあるが著者は土着の愛鄉心に燃えて、この島のあらゆる土俗を詳密に解說されたものである。蓋し東西約三里、南北四里面積八方里、現住人口四萬二千、一郡十二ケ村の嶽爾たる壹岐こそは、日韓交通の要路にあつて魏史に明にその大さを記したところであるが、大陸文化の最初の波をうけて、後から後から渡つてきた優秀な文化は多くは素通をしたらしい、從つてこの民俗誌をみると丹波や飛驒の山の中の生活と格段の差がないといふことを敎えられる。麴一升が玄米一升、小豆一升も玄米一升、黑糖一斤が麥一升（これは節からの轉化）などゝいふ物々交換の遺風が、この島にあると同時に、それは筆者幼時の丹波の麴屋を思ひ起さしめる。本書に記された四阿蘇葺の民屋の間取といふものが、中國から東山道へかけて全國的に共通してゐるのをみ

○島と漁村